

【研究ノート】

民族の境界から見えるもの ——韓国に生きる中国朝鮮族のエスノグラフィー的省察

Liminal Ethnicity: Ethnographic Unraveling of Chosŏnjok in South Korea

土佐 昌樹

Abstract:

This paper examines a theoretical perspective of liminal ethnicity based on my ethnographic research on Chosŏnjok (Koreans in China) who have returned to South Korea. The transnational migration of Chosŏnjok from Korea to northeast China started in the late 19th century, and continued to grow during the Japanese colonial period. The decolonization and the Cold War urged them to settle as an ethnic minority in China. But since the 1990's, along with the globalization and the economic development of their "home country", they have resumed their mobile lifestyle and continued to migrate to South Korea on a large scale. Although Chosŏnjok share the "same" language and culture with Korean people, they tend to form their ethnic enclaves in and around Seoul to protect themselves against discrimination and antagonism. My preliminary ethnographic research suggests that the ethnic identity of Chosŏnjok is characterized by two different dimensions: one is constructed by fixed images or stereotypes to differentiate themselves from the Korean nation based on minor differences; the other is concerned with the more flexible and negotiable strategies that frame daily social relations. This observation is congruent with the classic theory of F. Barth that the ethnic identity is dependent not on real cultural differences but on symbolic boundary maintenance. Thus, the identity of Chosŏnjok fluctuates between the assimilation into the mainstream of host society and the differentiation of their ethnicity despite a great amount of shared culture with the Korean nation. The significance of such symbolic boundary is led to further consideration about their liminal status between China and Korea. James Scott's thesis on Zomia, or mountain tribes and nomads who have formed their unique identity by escaping from the states of China and Southeast Asia, is very suggestive to develop my inquiry. In conclusion, it is suggested that the Zomia-like nomadity of Chosŏnjok may be a future symptom of fluidity of the modern nations including Korean, Chinese, and Japanese.

キーワード：朝鮮族、韓国、民族、ゾミア、境界性、アイデンティ

Key words : Chosŏnjok, South Korea, ethnicity, Zomia, liminality, identity

1. はじめに

グローバル化が加速度的に進行しているこの時代にあって、民族という問題設定にそもそも学術的探求に値する価値が残っているだろうか。本稿は、朝鮮族と韓国人という「同じ民族」の相互作用を題材に、そうした問題設定の可能性について考察を進めることを目的としている¹。

民族やネーションをどう位置づけるかといった難問には、これまで優れた論考が多数存在するが、いまだに最終的な正解はなく、主観的な集団アイデンティティを中立、客観の立場から評定することはそもそも原理的に不可能であるといえるだろう。人びとが日常的に身につけている視点にも、それを分析する研究者の視点にも、偏見や差別が抜き難く染みついている。複数の視点を比較したり、研究者の主観や権威を反省的に捉え直したりしたとしても、この隘路を抜け出すことは簡単ではない。近代主義者と伝統主義者、あるいは構築主義者と原初主義者など、そうした対立にはさまざまな名称があるが、科学的方法の限界を超えるためエスノグラフィーを持ち出したとしても、対立そのものが消え去るわけではない。しかし、そうした試行錯誤には認識論的前進が含まれていると考えることもできる。本稿は、韓国に移住を続けている中国朝鮮族のエスノグラフィーを模索しながら、ささやかな一歩を踏み出そうとするものである。

2. 朝鮮族とは

朝鮮族とは、19世紀後半から植民地時代にかけて中国東北部に移住した人びとを指す。清朝と朝鮮との交通は「封禁令」によって禁じられていたが、西洋帝国主義の到来とともに東アジア地域の政治状況が流動化し、貧しい農民が活路を求めて国境を超える移動が始まった。また、植民地時代後期には中国東北部は満洲として日本の実質的支配下に置かれ、新田開発のため朝鮮人の移住が促進され人口がさらに増えた。祖国解放後も多数が新生中国にとどまり、1980年代には190万の朝鮮族が中国に存在した。彼らは、中国籍を持つ少数民族として中国朝鮮族と呼ばれる。国境を接する北朝鮮との往復も限定的に可能であったが、基本的に彼らの生活舞台は土地に縛りつけられた農民のそれだった。勤勉さと教育を通じて離農や都市部への移動が徐々に表面化していたが、80年代までの朝鮮族の平均的な生活は変化の乏しいものだったといえるだろう。

ところが、韓国がめざましい経済成長を続け、冷戦構造の崩壊とともに社会主義圏との交流が自由化されるにしたがい、朝鮮族の人生を大きく変える力が歯車を刻みだした。地理的には北朝鮮出身者が多数を占める朝鮮族にとって、豊かな韓国が突如として新たな「祖国」として目の前に出現したのである。親族訪問や同胞ビザなどを活用し、次々に韓国へと渡る人の波が押し寄せた。中国

1 本稿は、科研費基盤研究 (C)「東アジアの国民的アイデンティティ変容をめぐるマルチサイトッド・エスノグラフィー」(課題番号20K01223)による現地調査の成果の一部である。インタビュー調査を行うにあたり、匿名でインタビューを引き受けてくれた方々をはじめ、多数から協力をいただいた。なかでも、ムン・ボーラ、金子雪絵、山田たかこ、宮本秀美、戸田郁子の各氏の力添えがなかったら、本研究の進展はなかった。この場を借りて謝意を表したい。

から海外に移民を送り出す地域といえば福建が有名だったが、いまや延辺は中国でもっとも人口流出の激しい地域として知られている。朝鮮族全体としては1989年の時点で年間9千人あまりの韓国訪問者数だったのが、91年には3万人を超え、92年に韓中国交が正常化するとともに移動が本格化していく。翌年はむしろ入国制限を加えたり、またコロナ禍によって移動が大きく制限された時期があったりしたが、今日まで就労、結婚、留学などを目的にした移住が後をたたない。2022年の段階で、帰化者を含めるとおよそ80万人の朝鮮族が韓国に住んでいるといわれる²。これは、韓国で増加し続ける在留外国人のなかでも突出した規模であり、単一民族社会から多文化社会への移行を企図する韓国にとって大きな試金石となっている。

朝鮮族は、中国同胞や中国僑胞とも呼ばれ、中国籍を持ちながら「同じ民族」であるというどっちつかずの位置づけを与えられてきた。彼らのアイデンティティは、韓国人にとって民族や国民の概念を揺さぶる境界線上の「例外」であり、「タブー」であるともいえる。それ故、韓国における多文化政策を検証するとき朝鮮族の移住の現実、書物や専門論文を通じてどの事例より頻繁に取り上げられてきた。

朝鮮族の移住が韓国社会に突きつけるジレンマは、1990年代の時点ですでに表面化しており、私自身も韓国の民族ナショナリズムの一症候をあらわす事例として取り上げたことがある（土佐2004: 166-7）。その後、2016年に移民政策研究院を訪問し、研究員から話を聞く機会があり、そうした印象はさらに深められた。ここは、2009年に韓国に設立された独立研究機関であり、移民に焦点を当てたアジアで稀有の研究センターだといえる。法務部の傘下でありそこから財政支援を受けているので、政府から完全に独立しているわけではないが、移民研究と公務員らに対する教育を目的とした機関の存在は、移民政策に対する韓国政府の本気度を示すものだ。初めて訪問したにもかかわらず、応対してくれた2人の若い研究員は、政府傘下の研究所が中立性をどこまで確保できるかといった自問まで含め非常に率直に話をしてくれた。

なかでも印象的だったのが、朝鮮族を韓国が抱えるもっとも深刻な「民族問題」だと強調したことだった。建前は同じ民族であり同胞だが、実際には外国人以上に異質な「よそ者」であり、国民にとって安手の労働力としてしか捉えられていない。「同じ」言語と文化を共有するという前提で、政府の移住民支援プログラムの対象になっていない。結果的に、地域社会への統合に失敗し、朝鮮族だけのコミュニティを形成することが常態化してしまった。日本にも日系ブラジル人の問題があ

2 「聯合ニュース」の記事（2020年2月17日付）によれば、韓国に住む在留外国人数がついに250万名を突破し、そのうち70万名は朝鮮族で最大の比重を占めることが報道された（<https://www.yna.co.kr/view/AKR20200216059900371>）。この記事の直後にコロナ禍に突入し、移動が大きく制限されることで増加に歯止めがかかった。最近の公的統計を確認すると、法務部出入国外国人政策本部が出している『2022年11月出入国外国人政策統計月報』によれば、在留外国人数は2,194,780名、そのうち朝鮮族が628,650名となっており、2年間でかなり減少したことが分かる（https://viewer.moj.go.kr/skin/doc.html?rs=/result/bbs/227&fn=temp_1671773511507100）。しかし、帰化者や不法滞在者を含めると、今でも約80万人の朝鮮族が韓国内に居住していると推測されている。

ると聞か、そうしたリターン・マイグランドの問題をどう考えるか。逆にそう聞かれ、それからインタビューというよりは活発な意見交換になったことが思い出される。

日系ブラジル人の事例もまた、政府のご都合主義的な移民政策や地域社会との葛藤を突きつける問題であるが、日本ではそうした問題がそもそも一般に認識されていない。韓国の朝鮮族は、誰もが知っている「問題」であり、共有されているイメージの鮮烈度が明らかに異なっている。どちらが正しいかは別にして、その点をまず踏まえておきたい。

グローバル化の進展と国境を超えた人の移動という問題は、固定した地域研究や本質主義的な文化研究の矛盾を乗り越える主題として、今やありふれたものとなっており、東アジアの文脈では朝鮮族の事例が好んで取り上げられてきた³。グローバル化の進展と歩調を合わせるように、中国朝鮮族の移動性は加速度的に際立ったものとなり、移住民と国民国家との関係を問い直す格好の事例となった。もし「同じ民族」という原則が崩れ、「国民」に差別的な階層制が持ち込まれることが許されると、近代的な国民国家の基礎そのものが揺さぶられることになる (Seol and Skrentny 2009)。いうならば、彼らはトランスナショナルな越境性を帯びた文化英雄^{トリックスター}であり、またどこにも属さない境界で「むき出しの生」を強いられた「ホモ・サケル」であると要約できよう。こうした意味作用は、いかにもこの時代に似つかわしい象徴性を帯びてはいるが、どこまでそこに妥当性があるか、もう少し深く掘り下げてみたいと思っていた。

コロナ禍の2年間をはさみ、ようやく2022年夏にソウルを再訪する機会が訪れ、朝鮮族に対するインタビュー調査を試みるのが可能になった。その過程で、韓国人が朝鮮族に対して抱く負のイメージが根強く生きていることがまず再確認された。

韓国人の知り合いと日本人の知り合いを通じてインタビューに応じてくれる相手を探したが、数次の知り合いを介してようやく少数の候補者を紹介してもらったのが限度であった。知り合いを介してもまったく思いつかないという反応も多かった。この事実だけでも、韓国社会を構成する社会関係のネットワークから朝鮮族がいかに周縁化されているかが知れた。また、紹介者を含め誰に聞いても、朝鮮族に対する負のイメージがぼんやり共有されているのが感じられた。90年代に生まれたそういうイメージがどこまで変化しているのかも今回の調査の目的であったが、出だしとしては古いイメージをなぞるような印象が強かった。

それは映画やドラマでおなじみのイメージだった。貧しく、暴力と狂気が渦巻くイメージ。例えば、『哀しき獣』(ナ・ホンジン監督、2011)は、韓国に出稼ぎに行ったまま消息を絶った妻を探しに、延辺の朝鮮族の男がソウルに向かい、暴力と陰謀に巻き込まれていくフィルム・ノワールだ。貧しい男が密航を決意したのは、延辺で韓国のヤクザと出会い、ソウルである男を殺したら借金が

3 論文ではすでに日韓英文で非常に多数のものが出されている。トランスナショナルな視点を持ち日本語で書かれた研究書だけに限定しても、権 2019、中国朝鮮族研究会 2006、玄 2013、松田・鄭 2013、宮島 2017などが挙げられる。いずれも朝鮮族の歴史をまとめるのに大いに参考になったが、韓国語の研究書を含めた個別的批評と研究史の紹介はいずれ別稿を期したい。

帳消しになるとそそのかされたからだ。舞台となったソウルのテリム洞は、朝鮮族が集まるエスニックタウンで、そこは暴力と欲望が支配する無法地帯として描かれている。物悲しい音楽と速いテンポの映像で描き出される物語は、差別や偏見に還元できない質の高い韓国映画の実力を示しているが、そこには朝鮮族と彼らの住むコミュニティがどれほど負のイメージで塗り固められているかも雄弁に物語っている。

『犯罪都市』（カン・ユンソン監督、2017）は、そうした負のイメージを極限まで推し進め、血みどろの暴力を爽快なアクションに仕立て上げることで高い興行収入を上げた人気映画だ。2004年に実際に起きた暴力団抗争事件に基づくフィクションだという但し書きとともに幕を開ける物語は、異常な残忍さを発揮するサイコの朝鮮族ヤクザと人気俳優マブリー演じる暴力刑事との対決を軸に展開するのだが、舞台となったのはやはり朝鮮族が多く住むソウルのカリボン洞だ。人気にあやかって第2作が2022年に封切られたばかりの本作は、朝鮮族のイメージを語るとき誰もが言及する作品でもある。

目立ったチャイナタウンのない単一民族社会として知られた韓国であったが、21世紀に入ってからいくつものチャイナタウンが生まれている。ソウルのテリム洞、カリボン洞、郊外の安山市などがよく知られたところだが、それ以外にも増え続けている。日本の例でいえば、横浜や長崎のように観光化され整備された中華街でなく、池袋や西川口のように「ガチ中華」で賑わう中国人による中国人のためのチャイナタウンに近い。大きな違いは、韓国に見られるチャイナタウンは実際には朝鮮族が大部分の住人であり、朝鮮族を相手にした不動産や仕事紹介の店とともに中国東北部の料理店が並び、朝鮮族向けの食材を提供する市場が賑わっているという点である。そして、そうしたエスニックタウンの一般的なイメージは、汚くて無秩序で犯罪が横行する闇の世界だというものだ。中国や東南アジアからの移住民が増え続けるなかで、もっとも目立ったエスニックタウンが「同じ民族」の朝鮮族によるものだという事実は、民族の意味を語る上でとても逆説的な教訓となっている。朝鮮族向けの食材といっても、実際にはほとんどが韓国料理に共通したもので、だから顧客も朝鮮族だけでなく安いものを求めて多くの韓国人が訪れる。些細な違いだからこそ、その違いにこだわることで大きな違和感と差別の根源となるという問題は、フロイトを始めよく指摘されてきた人間一般の性向であり、後にまた立ち返ることにしたい。

ここまで朝鮮族に対する「古い」イメージを再確認してきたが、今回の調査で出会った人びとからどのような発見があったかという点、そのようなイメージに合うケースは皆無だった点をまず強調しておきたい。1時間前後のインタビューを実施し、ライフストーリーについてかなり深い話を聞いたのは6人だけだったので、これだけで80万人の在韓朝鮮族を代表することはもちろんできない。しかし、そもそもエスノグラフィーのような質的研究は、量にこだわらない観点から発見法的な解釈を進める方法であり、今回の調査結果はまさにそのような意味合いを提起している。限られたケースを通じた考察がより一般的な文脈でどこまで妥当性を有するかは今後の課題である点を踏まえつつ、具体的な事例紹介をしていきたい。6つすべてを紹介するのは冗長なので、主に3つのケースに絞って進める。

3. 朝鮮族のライフストーリー

崔ヨンミ（30代女性、仮名）は、ソウル郊外の南揚州市で夫と息子、娘の4人で暮らしている。中国遼寧省の小さい町で生まれ育ち、26歳までごく平凡な人生を送っていた。小学校から高校までは地元の朝鮮学校に通い、普通の4年制大学を卒業してから大連の会社で数年働いた。父母ともに朝鮮族だったが中国語のほうがよくできたので、家では中国語と朝鮮語を半々で使い、学校では朝鮮語を使っていた。

大連で会社勤めをしていたとき、韓国人である今の夫と出会った。当時彼は日本で働いていたが、たまたま大連に出張に来た。彼は中国語ができず、私で会社で通訳の担当もしていたのが縁だった。付き合ってから結婚し子どももできたので、夫は韓国の会社に移った。中国にいた頃は、ドラマを見ては韓国の姑が怖いと感じていたもので、韓国人と結婚することはむしろ嫌だと思っていた。2014年に韓国に来て、別の場所に少し住んでから南揚州に移ってきた。夫の親はドラマと違ってやさしかった。

子どもが学校に通うようになり、今は子育てをしながら多文化家族支援センターで二重言語コーチとして働いている。外国から韓国に嫁いできた多文化家族では、一般に女性は自分の言葉を子どもに教えず、韓国語だけ使用する場合が多い。そこで、そうした家庭に二重言語使用を勧めるのが私の仕事だ。前からある制度だが、実際はセンターの主な役割は外国から来た女性に韓国語を教えることなので、必要性は認められているものの二重言語の促進はあまり重要な事業とは捉えられていない。よくいわれることだが、多文化という言葉は使っていても、韓国の政策の基本は多文化主義でなく同化主義だということは否定できない。ただ、事業としては全国的なもので、韓国全体で180名の二重言語コーチがいるという。地方では人材が不足し有名無実になることもある。

二重言語コーチの仕事は、1) 父母にその重要性を理解してもらうこと、2) 子どもに遊びを通じてそれを実践してもらうこと、3) 家族の集まりを作ってそれを感じてもらうこと、という3種類の事業から成り立っている。安山市のように大きな多文化地域では母親の言葉を教えてくれるベトナム語教室、中国語教室、フィリピン語教室などが設けられている。しかし、うちのセンターを含め、大部分のセンターにはそのような余裕はなく、父母に二重言語の使用を理解してもらうまでで精一杯だ。

韓国には朝鮮族に対する偏見や差別があることは知っているが、自分個人はあまり感じたことがない。以前、韓国の会社で少し働いたとき、仕事では朝鮮族だということは隠したほうがいいと上司から言われ、そうなんだと感じたくらい。自分の国籍は中国のままで、当分は変えるつもりはない。最大の理由は親が中国にいるため、ビザ無しでいつでも帰国できるからだ。息子は2つ国籍があったが、サード（THAAD）配備で韓国と揉めたとき、中国から出国するときの手続きで嫌がらせをされ、中国籍を放棄することにした。娘を出産したときは、当時は中国で2人目を出産すると罰金を払わないといけなかったもので、韓国でだけ出産届を出した。だから、子どもは2人とも韓国籍だ。

夫は江南（カンナム）の会社に通っているで、ここから地下鉄で1時間以上かかる。ここにはテリム洞のようなチャイナタウンはないが、朝鮮族の集まりがあることはある。普段はSNSで子育ての相談や情報交換をしている。休みの日に知り合いが集まり、朝鮮族の食べ物を持ち寄って一緒に食べたりすることもある。韓国の食事とほぼ同じものが多いが、キムチも餃子も少しずつ違うので、時々故郷の味を楽しみたくなる。最近はネットで朝鮮族の食べ物を注文することもできる。朝鮮族に会社勤めの人は少なく、食堂で働いている人が多い。結婚してここに住むようになった人が多いが、私のような偶然の出会いもあれば知り合いの仲介で来る場合もある。東南アジアの女性と違って業者が仲介するケースは少ないと思う。

コロナのため2019年以降は中国に行けていないが、これからも行ったり来たり的生活を続ける予定だ。夫は、将来は中国で働きたいというので、その可能性も考えている。自分はこちらで生活の基盤がようやく固まったばかりなので、ためらっている。中国に戻るとまたゼロから始めないといけない。親のことを考えると、そういう道もあるかもと考え始めてはいる。親とは別の都市で働くことになるだろうが、すぐ会える距離だと安心できる。韓国でも夫の親と少し距離をおいて暮らしていて、良好な関係を保つにはそれがいい。

中国の朝鮮族は、もともと北朝鮮の出身者が多く、以前は韓国よりそちらに親近感を感じていた。1960年代までは中国より北朝鮮のほうが豊かで、暮らしに困った人は北朝鮮の親戚からよく物を送ってもらっていた。

朝鮮族は、韓国人とほとんど同じ言語や文化的慣習を身につけており、そのことが韓国で暮らしていくにあたり大きな文化資本となっている。しかし、そこにある「些細な違い」が両者を決定的に分け隔てる根拠となる場合も少なくない。彼女の場合は言葉の訛りがほとんどなく、朝鮮族の出自を「隠す」ことも容易だったが、出身地や家庭環境によっては非常に特徴的な訛りがあって、それだけで朝鮮族であることが明らかになる。男性の場合はヘアスタイル、ファッションやちょっとした身のこなしで分かることもある。そうした識別は、「民族」の固有の属性からくるというよりは、階級的な懸隔のほうがより決定的な要因として作用しているのだが、偏見がいったん成立するとその根拠として文化的な違和感が回帰的に持ち出されるのかもしれない。彼女のように高学歴を持ち、韓国人と結婚して韓国で暮らしている朝鮮族は、ほとんど何の問題もなく韓国社会に溶け込んで生きているようだ。そうした人にとっての文化的差異は、休日に思いを馳せるほのかなノスタルジーくらいの比重であり、抜け出せない牢獄でもなければ、永遠に運命づけられたアイデンティティでもない。

しかし、学歴と階級上昇を通じて韓国社会に同化することが常に理想のゴールとなるわけではなく、同じような条件を持ちながらも少し「民族的差異」にこだわるケースもある。黒竜江省ハルビンに近い農村で生まれた張リャンス（30代、女性、仮名）は、貧しい家庭で生まれ育ったが物質的成功よりは精神的な価値に重きを置く道を選んできた。

父方の祖父は貧しい農民だった。両親もまた、生活のためあちこちの都市を移動しながら仕事を探し続けた。商売がうまくいくと私も合流し、一緒に暮らす時期もあった。小学校は朝鮮学校に通ったが、中学校は両親が住む北京の学校に通った。北京には朝鮮族があまりいないため、自分のように両親が出稼ぎの子ばかりを集めた学校に通った。高校は自分の戸籍があるところにしか行けないので、祖父のいる町の普通高校に入学し、一人で寄宿舎で暮らした。故郷の黒竜江省には朝鮮族がちらばっていて民族学校（高級中学）がなかった。

高卒後、1年の手続きを経て2009年に韓国のS大学映像学科に入学した。勉強はあまり好きでなく、何か面白そうなことがしたかった。3つの大学から留学先を選んだのだが、儒教に関係する大学だということも気に入っていた。私立大学なので授業料が高く、アルバイトをたくさんした。留学生にはアルバイトの時間制限があったが、皆それを無視して働いていた。肉屋や免税店の販売員など色々やった。韓流が流行っていたので、中国人観光客向けの商品の販売や、ドラマのシナリオ翻訳もやった。そのまま卒業するのが不安だったし、アルバイトで忙しかったので卒業には5年かかった。

当時も朝鮮族の留学生はある程度いた。留学生を対象にした特別クラスはなく、自分も小学校時代に朝鮮学校に通っただけで、家では中国語と朝鮮語を混ぜて使っていたので、話せても読み書きに苦労した。卒業すると留学生の大部分は中国に帰ったが、自分はここでなにかしてみたくて残ることにした。在学中に中国との合作映画プロジェクトに関わった縁で、映像関係の仕事がしたかったが、そのうちサードの問題が起きて中国に関係する仕事が減ってしまった。それでも将来は映画の演出をしてみたくて、関係する仕事を探した。映像コンテンツを販売する仕事についてたり、YouTubeなどで一人ビデオが流行りはじめたのを機に、児童ジャーナルの仕事についてたりもした。頼まれたコンテンツを制作するという意味で映像に関係はしているが、もともとやりたいことから離れてしまった。そうこうするうち、知人の紹介でMWTVに関わることになった。

MWTV (Migrant Worker Television) とは、韓国に住む移住労働者が主体となって活動を続けてきたNPOのことである。主な活動として、11カ国語の多言語ニュースの制作とインターネットを通じた放送、「移住労働者メディア活動家」を養成するためのメディア教育、そして移住労働者映画祭の開催運営という三本柱がある。私はその主要メンバーのミャンマー人と知り合いになり、彼を通じて韓国における移住労働者が直面している現実について、そして韓国社会を見る別の視線が存在することについて多くを教えられた。彼が移住労働者として受けた苦難を乗り越え、難民として認定され様々な活動に関わりながら韓国に定着するようになった過程については、すでに書いたことがある（土佐 2012）。その後、ミャンマーが民主化され、アジア最後のフロンティアとして大きな発展が期待される段になると、祖国の発展に寄与するため帰国して活動の中心を故郷の町に移し、新たな事業に着手した。その様子を見せたいという彼の誘いを受け、2019年2月には彼の故郷の町まで訪ねたこともある。

マンダレーから西に向かって車で8時間もかかるその小さな町は、チン州の山間に位置し辺境と

いってよい地理的条件にあるが、自然に恵まれ美しく落ち着いた町だった。町の隅々まで案内してくれ、事業の未来について語る彼の表情は明るかった。しかし、その後、国軍のクーデターによりミャンマーの政治状況は一挙に暗転し、周知のように民主派と内戦状態に突入し今日に至っている。コロナ禍とあいまって、多くの市民が無残な末路をたどった。彼の町もまた戦禍に巻き込まれ、彼の人生も粉々に打ち碎かれた挙げ句、2021年8月21日、病変により帰らぬ人となった。コロナのせいだと聞いたが、後に親しい友人から聞いたところではコロナではなく、持病の悪化だということだった。そうして帰らぬ人となったのであるが、彼がつかないでくれたMWTVとの縁がリャンスとの出会いを叶えてくれた。彼女がそこで働いていたのは2019年からの2年間で、ちょうどコロナ禍で韓国に行けなかった時期と重なり、直接の面識はなかったのだが、知り合いを通じ朝鮮族のスタッフが少し前までいたと紹介されインタビューを受けてもらえることになったのだ。

MWTVのスタッフは主にボランティアでまかなわれていて、私のようにフルタイムで雇用されるのは初めてのことだった。乏しい予算のほぼ全てが、私に払う給料として使われたのだと思う。そこでニュース制作に関わる仕事をまかされ、撮影、編集などすべてやった。ほんとうは映画を作る仕事に関わりたかったので、自分の関心とは距離があり少し悩んだ。移住民が置かれた境遇にはソウルと地方ではかなりの違いがあり、地方には怖い人が多いと感じた。農村のビニールハウスで寝起きさせられた移住労働者が冬に凍死した事件取材に行ったときは、心に深い傷が残った。それに、ニュースにすると単なる事件報道になり、自分にとって関心のある個人というものが消えてしまう。どういう姿勢や価値をもって取材すべきなのか、考えさせられる契機にもなった。

その事件が直接のきっかけではなかったが、一緒に制作するチームを維持するのが難しくなり、活動を考え直す時期だと思ってその仕事をやめた。MWTV自体も予算の面で行き詰まり解散することになった。残念だが、一定の使命を終えたということだと思う。移住民が置かれている状況が以前と変化したという側面もあるかもしれない。

朝鮮族という自分の立場については、あまり意識していない。その前に一人の人間だという意識で生きているが、韓国にはお前は朝鮮族だと指摘する人が多い。それが嫌悪や偏見につながる。朝鮮族を同じ民族として扱いながら、よく見ると違うといわれるのはあまり気持ちがよくない。中国で朝鮮族が築いた100年の歴史をもっと尊重してほしい。

朝鮮族の態度も世代や性別で異なる。男性は新しい価値を受け入れるのが苦手で中国に帰りがたがるが、女性はこちらに残りたがる傾向が強い。中国も変化が早く、経済的に発展しているので、どちらで生きるのがいいか判断するのが難しい。父は、もともとそうではなかったが、韓国のおかげで愛国者になった。韓国に来るたびこの社会が嫌いになり、自分が中国人であることを誇りにするようになっている。

祖父はもともと韓国慶尚道の出身で、土地もなく貧しくて食えないから植民地政府の勧めで開拓移民として満洲に移住した。その前は日本でも少し働いてお金を作り、故郷で結婚式を挙げてから中国に行ったらしい。南から中国に行く人は少なかったが、それほど貧しかったからだろう。韓国

に来てから祖父の故郷を訪れたことがあるが、小さな家が並ぶ貧しい山村だった。今では当時のことを知る人は誰もいなかった。祖父や父の世代は国民党と共産党が戦う中で愛国主義を注入された。私の中にも残っている。自分は中国人であり、韓国人から同じ民族だと言われるのは抵抗がある。

MWTVを辞めてからはお金のための仕事にはつかず、アルバイトをしながら映像作品を仕上げることに全力を傾けている。自分の夢を叶えるため、あれこれ撮影を続けている。経済的には大変だが、独身で自由なのでできるところまでやってみたい。

今も同胞ビザで暮らしており、国籍は中国のままだ。まだ親が生きているし、今後どうするかはすぐ決められない。おそらくずっと行ったり来たりを続けるだろう。どちらもいいところと悪いところがある。韓国社会のいい点は、民主的なところだ。映画を作る同胞に政府が支援してくれるのもありがたい。中国にはそのような環境がなく、中国で最も優れた映画はドキュメンタリーしかない。面白い劇映画は、シナリオ段階からの審議と検閲のせいで生まれてこない。韓国の悪い点は、差異に対して嫌悪を持つところだ。メディアの役割が大きいのと思うが、ここ数年は若者が中国を無条件で嫌悪する傾向が目立っている。

朝鮮族に中国と韓国の橋渡しの役割が期待されることがあるが、自分はよくわからない。10代の後半に韓国に来て、中国に対する感覚はその時から凍結状態にある。その後の中国についての認識は、他の人と同じようにメディアを通じたものばかりだから、中立的な知識や感覚を持っていると言いはし難い。また、自分の中国の友人らは、地方の小都市に住む庶民なので、SNSも使っておらず、離れていると連絡も取れない。働いていると帰る暇もなく、中国の現実からどんどん離れていっている。

彼女のように意識としてはほとんど中国人だが、生活感覚としてはほとんど韓国人だという微妙なバランスで生きている朝鮮族は珍しくない。また、貧しい中国での生活を抜け出すために豊かな韓国での苦勞に耐えるという図式も通用しなくなっている。中国が豊かになるにつれ、日本に来る留学生にも年々そのような傾向が顕著になっているが、韓国に来る留学生も、階級上昇を目指したハングリーなタイプよりは「自分探し」や精神的な価値を追い求めるタイプが増えているようだ。貧しく可愛そうな朝鮮族という紋切り型のイメージは、留学生に限っていえばあまり現実合っており、彼女らの自意識をネガティブに刺激する効果しかない。

その結果、彼女も指摘するように、男性の朝鮮族は韓国に反発し、自分たちだけの生活圏(enclave)を形成するか、中国へと回帰する傾向が強くと見られてきた。韓国人の民族主義が朝鮮族を包摂しそこない、彼らにむしろ中国朝鮮族としてのアイデンティティを目覚めさせ、新種の「民族」を産み落とすという逆説的な作用をもたらしているわけだ(金 1998)。そのような見方は私自身も共有してきたが、そうした解釈では取りこぼれる動きが予想以上に大きくなりつつあるのではないだろうか。

今回、男性の朝鮮族には1人しか会うことができなかった。間接的なツテを頼って紹介されたのは、建設現場で働くハルビン出身の男性だった。中学を卒業してすぐ食堂で働き始め、もっとお金になる仕事を求めて15年前に韓国にやってきたという。最初の頃は給料も低かったが、今では労組

の力もあって20万ウォン（約2万円）以上の日当をもらっており、生活に問題はないという。韓国籍を取得した朝鮮族の女性と結婚し、中学生の息子がひとりいる。彼自身は結婚ビザだが息子は韓国籍である。紹介者が彼の上司にあたり、仕事中のインタビューだったためすぐ横に控えていて、それを意識してか韓国に対する否定的なコメントは一切聞かれなかった。そうしたセッティングに加えインタビューが限られた時間だったこともあり、ここではその全体を紹介することは避けたが、上司は朝鮮族に対する差別や偏見が韓国社会にあることを一般常識として承知しており、むしろ彼の口から批判的な言葉が出ることを促しさえしてくれた。しかし、労働条件、日常生活、子どもの学校などの様子を具体的に聞いてみても、彼自身はどの面でも韓国での生活に満足しており、ここに住む朝鮮族の男性もだいたいそうだと断言した。これは言わされてのセリフではなく、移住労働者として韓国に來ている朝鮮族の実感を正直に吐露しているという印象だった。高学歴層の朝鮮族のほうがもう少し屈折した意識を持っていることは見たとおりで、そこには細かい違いに対するこだわりと非常に便宜主義的な戦略が併存している。最後に紹介するラ・ジョンミン（仮名）は、30歳になったばかりの大学院生で、朝鮮族には2種類あることを指摘し、韓国で朝鮮族に与えられた資源を便宜主義的に利用しながら生きている姿勢をあけすけに語ってくれた。

延辺近くの汪清県の出身であるジョンミンは、両親とも朝鮮族だが、ずっと漢族の学校に通った。家族や知人との会話も、中国語が多かったという。地元の大学で国際経済・貿易を専攻し、そこを卒業してから韓国に留学生としてやってきた。まず韓国語学校に1年近く通ってから大学に入り、今はK大学の大学院修士課程で中韓比較言語学を専攻している。彼女の生まれ育ちからはぐくまれた価値観は、韓国に來てからも基本的に変わっていないという。

韓国に來ている朝鮮族は2種類に分かれる。同じ朝鮮族といっても、朝鮮学校に通っていた子ら（朝鮮族組 조선족 반）はその子ら同士で遊び、漢族の学校に通っていた子ら（中国組 중국 반）はその子ら同士で遊ぶ。この前も、友だちに会って7名で写真を撮ったら、みんな中国組の朝鮮族だった。文化や考え方がすごく違う。よくわからないけど、一緒に遊ばない。漢族の学校に通っていた朝鮮族だけで遊ぶ。最近では忙しくてあまり遊んでいないが、休日には友達とカラオケに行ったりハイキングに行ったりする。カラオケでは韓国の歌でなく、中国の歌を歌う。

中国組朝鮮族といった呼び方をすると差別になるので、外から区別した呼び方はしないが、会って話をしてどういう学校に通っていたかを聞けばわかる。友達同士ではずっと中国語で話す。韓国語が便利なときは韓国語で話すが、主に中国語を使う。友だちと行くのは（東北地方の）中国料理屋。テリム洞まで行くのは遠いので、大学の近くにある店に行く。刀削麺などで人気のある店は韓国人も列を作っている。世代によって好きな食べ物も違うので、親の世代だと炒め物をよく頼む。親は好物だが、自分は冷麺は大嫌い。食べてるうちに麺が膨れてくるので、韓国冷麺も延辺冷麺も嫌いだ。でも、普通の朝鮮族は違う答えををすると思う。お互いが変な目で見て、中国組の食べ物は汚いと思われる。大きな違いはないし、みんな同じ友達だと思っているが、それほど一緒に遊ばないということ。前の世代の朝鮮族組は中国語があまりできなかった。

ジョンミンの家庭状況は少し複雑だが、家族の誰かがまず韓国に渡り、バトンタッチのように残りの家族が合流するというパターンは朝鮮族一般に見られるものだ。母親が自分の父と離婚し、韓国に来てから韓国人と結婚し韓国籍を取得したことにより、ジョンミンは永住権ビザ（F5）をすでに取得しており、制限のあるアルバイトではなく常勤の仕事につける。現在は、大手の教育企業で中国語の講師として勤務しながら大学院に通っている。朝鮮族はビザ取得の面で明らかに優遇されており、そのことを彼女も熟知している。

朝鮮族が留学に来て大学を卒業できないとH2（訪問就業）ビザになる。留学生の間はD2ビザ。朝鮮族の場合は、卒業さえできればF4（在外同胞）ビザをくれる。自分はまだ卒業もしてないが、永住権を得てビザの心配はなくなった。うちの会社の講師には、韓国人、朝鮮組の朝鮮族、中国組の朝鮮族、漢族の中国人という4種類の人が働いているが、朝鮮族がいちばん多い。最大の理由は、会社に採用されるためにはF4ビザが必要だから。中国人もここに留学すれば韓国語がうまくなるので中国語の講師をすることはできるが、ビザが朝鮮族のようにF4になるのが難しいからなかなか採用されない。

ただ、一般の外国人より朝鮮族が優遇されているとはいえ、競争の激しい韓国社会では彼女もまた楽な生活を送っているわけではない。連日、少人数クラスと出張対面授業の連続で息つく暇もないという。

今の会社にはもう5年もいるので、そろそろ辞めるつもり。給料は少なく、社会保険もないので、だいたい2、3年で辞める人が多い。週に6日勤務で、そのうち5日は退勤が夜中の10時、11時になる。普通の生活がしたい。まず修士課程を終え、普通の仕事につきながら博士課程に通いたい。もっと勉強がしたいというよりは、留学生は大学院に入りやすいし、周りも博士課程まで行く先輩が多いから。

自らの立場を便宜主義的に乗り換えながら、韓国と中国の狭間で波乗りを続けるような軽やかなフットワークで生き続けるジョンミンだが、韓国人と朝鮮族の関係に対するイメージは驚くほど固定している。

韓国人は、私たちのことが嫌い。今は中国語の先生の立場で韓国人と会うことが多いので、そういう偏見は感じないが、普通の会社に通ったらあると思う。昔よりましになったとは思わない。相手が金持ちで社会的立場のある人なら偏見は持たないが、貧しい人に対しては偏見がひどい。最近では中国に対して嫌う人が多いが、なかでも朝鮮族に対してより嫌悪を抱く。朝鮮組の朝鮮族はどう思うか知らないが、私たちは中国の少数民族であって、自分たちのことを中国人だと思っている。でも、ここに住み続けて、結婚したら子どもには韓国国籍を与えるのが便利だと思う。

4. 境界と民族

些細な差異をめぐって繰り広げられる韓国人と朝鮮族との間の現実的・象徴的戦いは、境界(boundaries)こそが民族集団のアイデンティティの根拠であると主張した、F. バルトの古典的な議論を思い起こさせる。彼は、なんらかの実体的な文化的本質が民族を構成するのではなく、境界そのものが集団を区別する根拠であると主張した。逆にいえば、境界さえ維持されれば、現実の社会関係や民族的特徴の中身がどれほど変化しても、民族集団のアイデンティティは保たれるということの意味する。

「境界は、それを横切る人の流れがあるにもかかわらず存続することが明らかである。…そうした境界を横切って、安定して持続的な、そしてしばしば極めて重要な社会関係が保たれており、また多くの場合、社会関係は二項対立的な民族的地位にまさしく基盤を置いている」(Barth 1969: 9-10)

ある民族集団に排他的に帰属するとは、境界維持によって社会的アイデンティティが保たれるということであり、そこに客観的な差異が存在するという意味ではない(ibid. 14-5)。すなわち、朝鮮族と韓国人を分かつ根拠は、客観的な差異である必要はない。実際、言葉の訛りや嗜好のちょっとした違いなどは、日本人を含め当事者以外の人びとにはほとんど弁別不能であり、そして彼ら自身にとっても早晚その弁別性を失うことだろう。そうした些細な違いに対する主観的な意味づけ、ないしイメージ化こそが重要なのであり、メディアの力によってそれが強化、拡散されれば、イメージは現実以上に現実的な効果を生み出すこともある。もし、境界が客観的な差異が喪失したあとでも維持されるなら、2つの集団は分かれたままであるかもしれない。

境界維持によって保たれるイメージとしてのエスニック・アイデンティティと、現実の社会関係や政治経済的な要因によって変化し続ける文化的実践は、そもそも原理的に一致することがないが、変化の激しい時代にそのズレはどこまで持続可能なものであるだろうか。バルトの論考のなかで、あまり産業化されていない集団(朝鮮族)が産業社会(韓国)に接触し、参加するとき、3つの基本戦略があると要約しているが、その分析枠組みがここでも役に立つ。すなわち、ホスト社会への同化、マイノリティとしての立場の受容、ないしエスニック・アイデンティティの強調のいずれかである(ibid. 33)。

もし現実の相互作用で葛藤や反目が目立たなくなれば、おそらく次世代以降は朝鮮族は韓国社会に溶け込み、なんの文化的違和感も残さず同化していくであろう。しかし、些細な違いをもとに境界が維持されている現状では、朝鮮族はマイノリティとしてのアイデンティティを守るしかない。そして、もし差別や葛藤が激化するような状況が続けば、朝鮮族は自らのアイデンティティをさらに強化し、政治的・文化的運動を発展させ、「新種」として独自の生活圏を韓国社会の中に築き上げることになるだろう。

現段階では、いずれの展開も理論的にはあり得るとしかいえない。研究者の批判的な解釈は、ど

ちらかといえば2番目と3番目の可能性を強調しがちである。しかし、ここで紹介した3人の発言に注意深く耳を傾ける限り、実際には1番目のシナリオがもっともありそうな筋書きだといえるかもしれない。それは、バルトもいうように、エスニック・アイデンティティに関わる境界維持の機能は、人間の文化的実践全体から見ればそのほんの一部に過ぎないからだ (ibid. 38)。大部分の文化的実践は、境界維持に関わりなく、個人の意志で学び、身につけることが可能であり、それゆえに個人と個人が属する社会は、エスニック・アイデンティティとは無関係の論理に基づいて変化し続けることになる。どこかで境界維持と文化の動態が噛み合わなくなったとき、隣り合った2つの集団は互いを区別することをやめるしかなくなる。それが同化であり、そこに主流社会からの意識的・無意識的暴力が含まれていることは否定できないにせよ、単なる一方通行の力に還元できない複雑な相互作用と可視化し難い精妙なプロセスもまた見られるとあってよい。可視化し難いのは、境界維持を保つ機能にとって、変化はそもそも無視すべき雑音でしかないからだ。現実の変化に盲目の境界は、最後の消滅の瞬間まで同じイメージを反復する以外の働きをしない。

ただ、バルトの図式で曖昧なのは、誰が民族の境界を引くのかという点だ。境界は複数の民族間の相互作用に含まれているとも、あるいはそれに先立つ先験的な条件であるとも読める。今日ではその主体はまぎれもなく国家であり、国家との関係を抜きに民族のあり方を明確にすることは不可能である。そこで、境界と民族のアイデンティという問題を少し別の角度から追究するため、朝鮮族という存在自体が、韓国（朝鮮）と中国の狭間で生み出された境界の (liminal) 民だという、関連する大きな論点に注目してみたい。

朝鮮族と韓国人が相互にいだくイメージは固定的で、偏見といってよい性質を強く帯びている。しかし、両者の日常的な相互作用や社会関係は、かならずしもそうした固定的なイメージや構造的條件に縛られていない。家庭、学校、仕事、結婚など生活のあらゆる舞台上で現実の選択や行動を導いているのは、もっと便宜主義的で瞬発的な「ゲーム感覚」ないし「実践感覚」と呼べるもので、イメージが固定しているのに対し現実には不断に動き続けることになる。韓国にいる限り、朝鮮族は力関係で圧倒的に不利な立場に置かれており、マスメディアからSNSに至るあらゆるメディアにおいて韓国人の偏見のほうが一際立つことになるが、だからといって朝鮮族のほうに韓国人や韓国社会に対してより公正な見方をしているわけではない。それでも、中国人と韓国人との境界上に生きるという状況そのものが、朝鮮族に独自の中立的な世界観と実践感覚を発展させてきたことは否定できないであろう。

その点をもっと一般的な水準で考察してみよう。朝鮮族は国家と一義的な関係を持たない遊牧民であり、中国にせよ韓国にせよ、主流社会への同化がかなわない状況では、エスニック・アイデンティティを維持する以外に選択肢はなかった。東アジアにも押し寄せる多文化主義的なイデオロギーは、そうした境界維持の作用に加勢することになり、彼らが境界の民のまま独自のアイデンティティを発展させる可能性もある。2番目に紹介したリャンスのようなクリエイティブな人材に注目したり、活動家や起業家に目を向けたりすることで、境界性と文化的創造性の結びつきが強調され

れば、中韓の政治的葛藤が深化するような状況下で朝鮮族の特殊なアイデンティティを実体化する地点まであと一歩となる。

こうした解釈の理論的含意を突き詰めるため、東アジアの「民族」の問題を歴史的俯瞰の中で見直してみる必要があるが、そうした作業にとってジェームズ スコットの『ゾミア』が有力な道標となる。

ゾミアとは、中国雲南地域から東南アジアの山岳地域にかけて散在する多様な山地民、ないし遊動民を指す言葉であり、部族に相当する集団的あり方を意味する。スコットは膨大な史料を渉猟しながら、彼らは辺境に取り残された未開民族でもなければ、文明の垢に染まっていない野生の民でもなく、国家から逃走することで今の生活を戦略的に選び取ってきた人々だということを証明しようとした。国家との複雑な相互作用こそが、一見国家とは無縁の多様な遊動民族のアイデンティティを形成してきたという見方は、「民族」の生成と歴史を考えるとときにとても啓発的なヒントを与えてくれる。

「山地民に対する烙印——地理的周縁性、移動性、焼畑農耕、流動的社会構造、宗教的異端、平等主義、文盲と口承文化——は、文明から取り残された原始社会の痕跡ではなく、国家からの逃避と国家形成をはばむための適応の結果と見なすのが妥当であろう。山地民にとって、国家の世界は魅力的でもありまた同時に脅威でもあったが、これら山地社会の特徴は、国家に従属しない人々が国家世界に対して展開してきたさまざまな政治的適応の痕跡なのである」（スコット 201: 39）

こうしたダイナミズムの中で民族を捉える視角は、国民／民族／部族という古典的な枠組みに新たな息吹を与えてくれる。朝鮮族の問題を考えると、この見方はどれだけ有効だろうか。スコット自身は、ゾミアが一定地域を超えた地球的な現象だと指摘する一方で、その理論的射程を20世紀前半までに限定している。その主たる理由は、移動やコミュニケーションのテクノロジーが急速に発展することで、国民国家の包摂の網の目から自由な地域が地球上からほぼ消えつつあるからだ。さらに、部族に対する次のような捉え方は、中国東北部の朝鮮族にゾミア的視点を持ち込むことにためらいを感じさせる。

「部族とは、適応の結果を表す、いわゆる「二次的形態」であり、国家や帝国との関係のなかでのみ双方向的に作られてきた。「部族」の対義語または対になる言葉は「小作農」である」（ibid. 260）

朝鮮族の歴史的アイデンティティは、明らかに小作農であり、中国東北部に移住することで、地域に水田耕作が広められてきたという明白な歴史がある。朝鮮族は、山地民や遊動民というよりは、国家に近い平地民に位置してきた。例えば、旧日本帝国において朝鮮人は日本人に次ぐ地位を与え

られたため、シベリアの朝鮮人が日本のスパイとしてソ連による強制移住の対象となるなど、過酷な運命を課されることもあった。しかし一方で、間島を始めとする満洲の一部地域が抗日運動の拠点になっていたことなど、国家権力に抗する運動の母体となった側面もある⁴。

植民地朝鮮、中国、ロシアの狭間でバルチザン運動に身を捧げ、日本帝国への帰属を拒み、国家からの逃走を続けた（一部の）朝鮮族は、まさにゾミアの具現であった。そしてこの地域には昔から中国の国家権力に包摂されない諸「民族」の複雑な興亡史が見られたことを想起するなら、伝統的にゾミア的な見方がこの地域にも当てはまるといって無理はないであろう⁵。

5. 東アジアのグローバル化と民族

日本、韓国（朝鮮）、中国が代表する漢字文化圏では、「民族」という漢字語に対する特別な歴史的ニュアンスがあり、また英独仏語に起源を持つ近代民族概念の複雑さが加わり、それを踏まえた学術的な議論が展開してきた。今日でもそうした議論に決着がついているとはいえない面が多く、ここではあくまで折衷的な要約にとどめながら議論をすすめる。

まず、ドイツ語のVolk、フランス語のethnie、英語のethnic groupないしその抽象化されたethnicityといった言葉があり、これは漢字語で民族という用語に該当すると考えてよいが、nationというやはり近代になって東アジアに移植された概念との関係を考えてみると話が複雑になる。こちらは、今日では「国民」と訳すことが多くなったが、民族と訳すことも多く、とりわけ日本や韓国のような単一民族社会という前提が生きているところでは、両者の区別は曖昧になる。その場合の民族は、あくまで近代的な国民国家を構成する同質的な集団という点が強調されるので、一つのnationが一つの国家を構成する近代的なnation-stateは民族国家と訳されることもあれば、国民国家と訳され

4 矛盾の塊であった満洲国を批判的立場から「キメラ」と形容した山室信一は、次のように満洲国のリミナルでユートピア的な一面についても述べている。

「三〇を超える民族の複合国家であった満洲国には、白系ロシア人やユダヤ人、ポーランド人なども住んでいました。満洲国では対ソ連情報を得るためにも反ソ意識の強い白系ロシア人や中央アジアから逃れてくるムスリムを保護する方針を採り、建国大学などには白系ロシア人学生も入学していました。このため白系ロシア人やムスリムにとっても満洲国は一種のアジールとなり、ソ連から圧迫された人々に生活拠点を提供しましたが、逆に敗戦後のソ連侵攻のなかで圧迫を受ける原因ともなりました」（山室2004: 364）。

5 ここで取り扱える範囲を超えた問題であるため詳述は避けたいが、東北アジアから中央アジアにかけて広がる広大な地域には、ゾミアの射程には収まりきらない「諸民族」のダイナミックな歴史的興亡が見られた。匈奴やモンゴル帝国などの実例が端的に示すように、この地域の遊牧民・遊動民は国家から逃亡するにとどまらず、定住民国家を解体・再編し世界帝国を築き上げる主体となることもあった。彼らをゾミアと呼ぶか部族と呼ぶかは脇に置くとして、そうした人々の集合体はほとんどの場合は民族以前のミクロで流動的なネットワークとして存立しながら、ある一定の歴史的条件下において民族や国家を超越し、飲み込むような巨大な存在へと変貌した（杉山2011）。これは中国南部や東南アジアでは見られない歴史的ダイナミズムであり、ゾミアの問題設定と民族論に新たな理論的展開を要求するものといえよう。

ることもあり、民族とはすなわち国民だということになる。アメリカのような移民社会では、nationとそれを構成する下位区分としてのethnic groupは区別しやすいが、東アジアではその点が曖昧になる。

近代ナショナリズムを生み出した西ヨーロッパは、その点で東アジアと似ている。nationとethnic groupの区分は、アフリカを始めとする植民地や北米社会の特性が要請したと見ることもできるだろう。さらに民族の定義を複雑にしているのは、国家とは距離を保った次元において民族に類似した人間集団が存在するからだ。英語のtribeという言葉は一般に「部族」と訳され、主にアフリカやアラブ社会を対象とするときに使われた。しかし、そこには疑似民族としての侮蔑的な響きが伴うことから、社会進化論的な偏見から脱却するためにtribeの代わりにethnic groupやethnicityといった用語に切り替える趨勢が支配的となった（Cohen 1978）。しかし、それは英語圏に偏った議論であり、そもそも言い換えによって社会進化論的な偏見が払拭できるわけではないという妥当な批判もある（原口1996: 191-209）。

現実として、アフリカだけでなくユーラシアにも遊牧民や山地民など、国家に包摂されることを拒否する人間集団が今でも多数存在するし、スコットの『ゾミア』のようにそこに国家の限界を超える契機を見出そうとする研究があることも見た。そもそも、近代的な国民国家を社会の進化の頂点に置くような素朴な議論は今では見出し難く、主要なナショナリズム論もほとんどは批判的な理論的志向性を備えている。そうした趨勢を踏まえ、「民族以前の民族」（ないし民族以後の民族）の存在について考えを進めるべきときが再び来ているといえるかもしれない。

19世紀に西欧列強の進出が東アジアにまで達し、その過程でnationやVolkといった近代的概念も伝わり、日本でまず漢字語への翻訳が試みられ、それが朝鮮や中国へと逆輸入された。民族という言葉自体は、それ以前にも中国の古典の中に見られるが、国家と結びついた意味は近代的概念として再定義されることで生み出されたといえる。その後の概念の変遷をここで詳しく追う余裕はないが、起源と基本的意味を共有しながらも東アジア三国ではかなり対照的な道筋をたどることになった。

19世紀後半から20世紀に入る頃まで、ナショナリズムには「アジア主義」という有力なライバルが存在し、民族の概念も人種とほぼ同じ意味で解されることが多かった。すなわち、「白人民族」の侵略に対する「東方民族」の団結を呼びかける趣旨で「民族」は使われ、それは国家の枠を超える概念であった。とりわけ、国難に直面していた朝鮮では、アジア主義に対する期待が大きかった。伊藤博文を暗殺した安重根の憤懣も、アジア主義を掲げながら近隣国の侵略に走った日本の「裏切り」に対する失望から発するものだった。その後、日本によって国権を奪われた朝鮮では、民族の概念は国家との結びつきを見失い、むしろ国家に縛られることのない超越的で精神的な実体へと変容していった。そうした超越的な意味作用は、解放後も受け継がれ、多文化社会への変容を促された今日へと至っている（土佐 2017, 2020）。

中国でも、バラバラな民衆を一つの政治的共同体として統合し、西欧列強や日本の侵略に対抗するという意図で民族の語は使用された。孫文の思想に見られるように、一国家一民族という西洋ナショナリズムを実現することが、近代中国の建設にとって必要不可欠な課題だと考えられた。しか

し、実際の中国はそのようなイデオロギーでまとめ上げるには、あまりに国土が広大であり、地方的文化的差異も大きかったので、少しずつ中国独自のものへと変容していく。ソビエト社会主義を通じ、民族は階級闘争によりやがて消散するという考えの影響も受けながら、一方ではシロコゴロフを始めとするロシア的民族学の受容から独自の民族学が発展し、少数民族を学術的に認定する作業が進められてきた。現在では、漢族以外に55の少数民族が認定されているが、「中華民族」というときは56すべての民族を包含した集合体を指す。すなわち、民族とは文化と帰属を基準としたエスニックグループであると同時に、国家を構成する「国民」と同等の集団でもある。その場合の国家とは共産党であり、国家は民族の集合体を超えた上位の立場に君臨している。台湾に住む住人も中華民族の一部であり、そこには差異の尊重よりは一つの政治的共同体として統合されるべきだという力学がより強く働いている⁶。

日本もやはり歴史的な状況によって民族の意味は変遷し、その過程にはご都合主義的な変節とあってよい局面も少なくなかった。日本人というとき、そこには血縁的で人種的な均質的民族観がぼんやり前提とされているが、近代化してずっと一貫してそうであったわけではない(小熊1998)。とりわけ、大日本帝国として沖縄、台湾、朝鮮などを併合していき、その地に住む人びとを「臣民＝天皇の子」として包摂する必要があったとき、狭い民族主義は役に立たずむしろ否定、超克の対象となった。現実には差別や不平等が克服できていたわけではないにしても、政治文化の原則は満洲の「五族協和」に代表される多文化主義的なイデオロギーであった。朝鮮のナショナリズムが「民族主義」として先鋭化していかざるを得なかったのに対し、戦前の日本のナショナリズムは国家主義を全面に押し出し多民族社会を統合していく運命にあったともいえる。敗戦後、日本は一転してこの過去の遺産を忘却し、日本に住んでいた台湾、朝鮮など「外地」の出身者は、日本国籍を剥奪され「少数民族」の位置に置かれることになった。外地に移住した日本人が敗戦で帰還すると、彼らもまた故郷では厄介者扱いされた。一方で、中国が共産党支配の大陸と国民党支配の台湾に分かれ、朝鮮が南北に分断されることで、国内少数民族の問題は極めて政治化され、複雑な屈折を抱え込むことになった。

こうした短い要約ではとても捉えきれない複雑な「民族」の動態史のなかで中国朝鮮族の生は左右されてきた。彼らは中国籍を有する中華民族の一部であり、また文化、言語、血縁を共有する韓民族の一部であり、日中韓の過去1世紀以上に渡るナショナリズムのせめぎあいの末に新たな移動性を発揮し始めたのである。朝鮮族の動きは、朝鮮朝と清朝の封禁政策の弱化とともに始まり、植民地時代に満洲への移民として大きなうねりとなり、また日本に対する独立運動の揺籃ともなったのであるが、その後東アジアにおける新国家建設とともに高揚した新興国ナショナリズムと冷戦構造のなかでいわば凍結した状態に置かれ、1990年代以降に進展したグローバル化とともに再び激し

6 中国における民族の概念と歴史を限られた紙幅で適切に要約するのは無理だが、複合的な視点を持つ研究が増えており、とくに毛里 1998、加々美2008、王 2006、劉 2006などの研究書がここでの問題意識を発展させるのに役立った。

い遊動性を取り戻した状態にある。その運動は、別の枠組みから捉えると、nation/ethnicity/tribe という「民族」の複合性を状況に応じて往還しながらよりよい生を模索してきた過程そのものでもある。それは、中国人（中華民族）、韓国（朝鮮）人、日本人という同化主義的傾向の強い東アジアの主要民族が内包している脆さとゆらぎを凝縮して表現してきた境界の民であるわけだが、グローバル化がさらに加速度的に進展するであろう21世紀の文脈では、そちらのあり方のほうがより先導的なものとなる可能性も小さくないのである。

今後の展開について単純な予測はできない。中韓のナショナリズムに翻弄されることもあれば、コロナのようなパンデミックが起きるだけで、彼らの遊動性が一挙にしばむこともある。それより重要な動因として、グローバル化の時代に生き残るナショナリズムは、かならずしも遊動性と矛盾しないことを忘れるわけにはいかない。激しい競争と不安定な身分で移動し続ける個人の人生とは、この時代に生きるすべての「国民」に課された運命であり、もはや遊動民だけに課された特別な条件ではない。

言葉を換えるなら、朝鮮族のような境界の民がもつ遊動性を変に持ち上げることもまた別の固定的な偏見でしかなかろう。通過儀礼における移行の局面から見いだされた境界性の概念は、文化のダイナミックな変化を理解する大きな鍵となってきたが、通過儀礼という伝統的な制度が弱体化し、境界性の中で手なずけられてきた危険で創造性あふれるどっちつかずの時間がいわば日常化してしまった現代において、そうした図式を機械的に適用するだけでは大きな認識の前進は見られない（Horvath et al. 2018, Thomassen 2014）。革命、投機的経済行為、欲望の解放、ゲームと遊戯の前景化、平等性の世俗化といった伝統世界では非日常だった要素や出来事が日常化し、成長の儀礼が与えられないまま人間の精神的混乱や「ひきこもり」が蔓延するのが近代であるとするなら、近代とはすなわち「永続化された境界性（permanent liminality）」だという主張には大きな説得力がある（Szakolczai 2017）。どっちつかずの境界の状態から安定・成熟した「国民＝大人」の身分へと成長するという図式ではなく、不安定で流動的な生が永続化された状態がどこまでも続いていく。そのとき、国民や民族という固定的なイメージがなおさら慰撫の力を発揮することが期待されるかもしれないが、そうした超越神としての座はどこまで維持されるものだろうか。安定しているように見えて、ちょっとしたことで民族とはあつという間に流砂のように不定形の姿を晒すものではなかったろうか。朝鮮族と韓国人との出会いは、そのことをあらためて考えさせる寓話を含んでいるのである。

引用文献

- 青柳まちこ編 1996 『「エスニック」とは何か——エスニシティ基本論文選』 新泉社。
 王柯 2006 『20世紀中国の国家建設と「民族」』 東京大学出版会。
 小熊英二 1998 『＜日本人＞の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』 新曜社。
 加々美光行 2008 『中国の民族問題——危機の本質』 岩波書店。

- 金在国 1998 『日本人のための「韓国人と中国人」——中国に暮らす朝鮮族作家の告白』（館野アキラ訳）三五館.
- 権香淑 2019 『《増補新版》 移動する朝鮮族——エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社.
- 杉山正明 2011 『遊牧民から見た世界史 増補版』日経BPマーケティング.
- スコット、ジェームズ 2013 『ゾミア——脱国家の世界史』（佐藤仁他訳）みすず書房.
- 中国朝鮮族研究会 2006 『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所.
- 土佐昌樹 2004 『変わる韓国、変わらない韓国——グローバル時代の民族誌に向けて』洋泉社.
- 2012 『韓国社会の周縁を見つめて——村祭・犬食・外国人』岩波書店.
- 2017 「日韓関係とナショナリズムの「起源」Ⅱ——平等とルサンチマン」『AJ Journal』vol 12: 61-78.
- 2020 「日韓ナショナリズムの起源と展望——文化人類学からの視点」『世界平和研究』228: 19-37.
- 原口武彦 1996 『部族と国家——その意味とコートジボワールの現実』アジア経済研究所.
- 玄武岩 2013 『コリアン・ネットワーク——メディア・移動の歴史と空間』北海道大学出版会.
- 松田素二、鄭根埴編 2013 『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』京都大学学術出版会.
- 宮島美花 2017 『中国朝鮮族のトランスナショナルな移動と生活』国際書院.
- 毛里和子 1998 『周縁からの中国——民族問題と国家』東京大学出版会.
- 山室信一 2004 『キメラ 満洲国の肖像 [増補版]』中公新書.
- 劉正愛 2006 『民族生成の歴史人類学——満洲・旗人・満族』風響社.
- Barth, Frederik 1969. "Introduction" *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*. Little, Br-Own and Company. 9-38. (青柳 1996: 23-71)
- Cohen, R. 1978. Ethnicity: Problem and Focus in Anthropology. *Annual Review of Anthropology*. 7, 379-403. (青柳 1996: 141-187)
- Horvath, A., Thomassen, B., & Wydra, H. (Eds.). 2018. *Breaking Boundaries: Varieties of Liminality*. Berghahn Books.
- Seol, Dong-Hoon and Skrentny, John D. 2009. "Ethnic return migration and hierarchical nationhood: Korean Chinese foreign workers in South Korea" *Ethnicities*. Vol 9(2): 147-174.
- Szokolczai, Á. 2017 "Permanent (trickster) liminality: The reasons of the heart and of the mind" - *Theory & Psychology*. Vol. 27(2): 231-248.
- Thomassen, Bjørn. 2014. *Liminality and the Modern: Living Through the In-Between*. Ashgate Publishing Ltd.

2022年10月31日受付

土佐 昌樹：国士舘大学 21世紀アジア学部 教授